

史学会総会におけるフィンライの発見の功績顕彰」となっているから、その号に小川先生の署名のときの記載文が掲載され、先生はこの号を受領されたことと思われる。この叢書は非売品で、とくにキューバの医学史に興味を持って研究する人だけに無料で配布すると記してある。

キューバの医学研究の貢献者である小川鼎三先生のおかげで、私も入手困難なこの切手書をたやすく入手できたので、そのことを先生に報告して、喜んで頂いた。それ以来、私はキューバの医学切手の調査には、しばしば本書を利用している。記載文はスペイン語だが、私は辞書の助けによれば大体のことがわかる。以上に記載した当時のことを想い起こし、先生の霊の御冥福を祈りながら、この追悼文を記した。

最後に、フィンライ顕彰の切手写真を掲載させて頂きたいと思う。

(1)フィンライの生誕一〇〇年を記念して、一九三四年キューバで発行された肖像切手。

(2)一九五〇年パナマで発行された黄熱を伝播するネッタイシマカ *Aedes aegypti* の切手。パナマは黄熱の撲滅によって、パナマ運河を開通完成させたので、フィンライの功績を顕彰してこの切手を発行した。

フィンライの切手はこのほか数種ある。

追憶の小川鼎三先生

大塚 恭 男

恩師小川鼎三先生が去る昭和五九年四月二十九日に長逝されてより、早くも数カ月が経過した。この一月一八日には鎌

倉の淨智寺で先生の分骨法要が行われた際に御遺族の皆様や先生の解剖学、医学の学統につながる人々と久しぶりにおめにかかることができ、ありし日の先生のおもいで話がいろいろとなされたが、あらためて先生の偉大さが思われた。また、縁あって、旧臘二一日に大分県日出市松屋寺の先生の御墓所を訪ねる機会があった。松屋寺は小川家の菩提寺で曹洞宗でもきつての名刹といわれる寺である。天然記念物の日本一の大蘇鉄があり、寺の奥のやや高い所にいかにも先生にふさわしい清楚で格調の高いお墓が建てられていた。先生は日出の隣の杵築の御出身の由であり、少年時代のことを綴られた「生いたちの記」には、杵築、日出の名前が多く語られている。通りを歩いてみると、少年時代の先生を彷彿させるような学童が遊んでいてひとしおの感慨がそそられたのだった。

小川先生が御自身のことについて書かれたものには「生いたちの記」(『Medical News 誌』所収、『順天堂大学医学部医学史学研究室開講二十周年業績目録』再録)と「医学と私」(『メデイカルトリビュン』所収、のち同社より単行本として刊行)の二つがある。前者は先生の御誕生より大分県立杵築中学校を卒業されるまでの間の記録であり、後者は御出生より昭和五年頃までの記録である。いずれも、先生独特の御人柄のにじみでた、そのままの口吻を伝えるような達意の文章で些かの虚飾もなく、淡々と語りかけてくれる。これらを読んで感動することは多かったが、下手な引用は避けたいので、ぜひ全文をお読みくださるようお奨めしたい。

先生はきわめて天分に恵まれた方で、その御業績は多彩である。またキャリアーとしても、初めからこれと決めた道を歩まれたわけでは無く、その都度軌道修正もされ、更に主軸とされた学問の関連領域についても単なる教養の域を脱したうちこみかたをされたように思う。伝記を拝見すると、中学の頃に博物学の時間に見た光合成の研究に強く惹かれ、これを一生の仕事としたいと思われたとのことである。その頃、すでに東京帝大の柴田桂太先生がその方面の権威であることまで調べられ、将来は東京帝大で学びたいと思われたという。また、同じく中学生の頃、別府湾に停泊中の潜航艇を見て感激され、造船技師を夢みられたこともあったという。そして、結局は光合成の線から三高の理甲に進まれたが、三高在

学中に須藤新吉教授から聞かれたヴントの心理学に強く惹かれ、脳の生理学を専攻したいと思われたが、それにはまず脳の解剖学をしっかり身につけねばとのお考えで、解剖学を志されたというのである。

先生は大正一一年に東大医学部に入学され、同一五年に卒業されている。東大で学ぶ学生の多くは卒業後母校のしかるべき教室に残って研究を続けるのが通例だが、先生は脳の解剖学を学ぶには岡山大学の上阪熊勝先生か東北大学の布施現之助先生につくのがよいとの御判断をなされ、結局布施先生のもとで研究生生活を送られることとなる。先生の処女論文は「アザラシの脳におけるブルダツハ氏核の研究」と題するもので、人の脳を解明するために比較解剖学的方法をとられたことが私には大変興味深く思われた。というのは、先生は医史学の分野でも、中心とする命題を深く追究されるのは勿論だが、その周辺、更には一見関係がなさそうな領域をも十分に調べられ、そうして得られた膨大な知識から本来の問題点を浮き彫りにされるといふ方法を好んで用いられたように思うからである。先生はアザラシ、オットセイ、ラッコ、イルカ、クジラなどの脳を精力的に御研究され、後に学士院賞の対象となった「赤核に関する研究」と結実していったのである。

先生は布施先生を尊敬することきわめて厚かったが、仙台御在任中に赤核をめぐる布施先生と意見が対立されたことがあった。この議論の時に、布施先生が「真理とは何であるか」と言われた。これに対して、先生は「私のほうこそそういったかったのである」と『医学と私』の中で告白されている。その日は昭和八年三月二五日で、恰度その日にお生まれになった二番目のお嬢さんに「真理子」と命名されたとのことである。このエピソードは、先生の一面を理解する上に重要であろう。話が前後するが、先生は昭和二年の暮に、当時東北大学理学部生物科の学生であられた石原文代様と御結婚されている。

先生はロックフェラー財団の基金を得て、昭和一二年九月に渡米され、シカゴのノースウェスタン大学神経学研究所のランソン教授、ドッサー・ド・バレン教授のもとで約一年間学ばれた。昭和一三年末に欧州を経て帰国され、昭和一四年

四月に東大助教に就任され、更に一九年四月には東大教授に昇任されている。

私事になるが、私は昭和二六年に東大医学部に入学した。当時は小川先生と藤田恒太郎先生が解剖学講座を担当されており、草間敏夫、中井準之助両先生が助教であられた。私どもの入学試験の生物の問題には、「蛙の解剖図を書け、ただし図は二つ以上にわたってもさしつかえない」というものがあつた。入学して間もない日に小川先生が御講義の中で、「蛙の解剖図の問題は僕が出題したのです。なかなかよくできとつたが、中には横隔膜まで書いてつた人もありましたな」とおっしゃつた。たまたま昭和二六年は先生が「赤核に関する研究」で学士院賞をお受けになつた年であつた。私たちはこの高名な先生の御警咳に接することのできるのを大変な光榮と思つたとともに、先生の飾らないお人柄に一層尊敬の念を深くしたものだつた。

小川先生の御講義を聴いた学生は、解剖学のことは忘れてしまつても、麻田剛立、山脇東洋、杉田玄白、前野良沢らの話だけはよく覚えてゐる。大阪の中井履軒に『越俎弄筆』（一七七三）という著書がある。これには解剖図があり、先生の御見解では、実際に人体の解剖を見た人でなければ書けない図であるという。この本は『解体新書』に一年半ほど先立つて著わされてゐることが重要で、その解剖をした人として先生と同郷の豊後の国の天文学者で医術をも修めた麻田剛立に違いないとの御判断をくだされたのである。『越俎弄筆』の序文に「我が友人豊国麻子」とあるのがその根拠である。先生の医史上の最初の業績は、昭和一三年に著わされた『シーボルト研究』中の「シーボルトと本邦の鯨」と題する論文であり、ひき続いて、昭和一六年に日本学士院編『明治前日本医学史』が企画された時に「明治前日本解剖学史」を分担執筆された。しかし、戦争のために本書の出版はおくれ、昭和三〇年に至つて漸く印行されるに至つた。

先生は昭和三五年に内山孝一先生の後をうけて日本医史学会の第七代理事長に就任された。そして昭和三七年に東大教授を定年退職されると同時に順天堂大学教授になられ、医史学教室を開設され、主宰されることとなつたのである。先生の医史上の御業績は昭和五七年一月に刊行された『順天堂大学医学部医史学研究室開講二十周年記念業績目録』に列

挙されているが、単行本としては『医学の歴史』（中公新書、昭和三九年）があり、これに対して毎日出版文化賞が贈られている。

先生はまた早くから東洋医学に関しても十分な御理解をお持ちになっておられ、昭和二五年に日本東洋医学会が設立されて程なく同学会に入会され、評議員をずっとお務めいただいたばかりか、昭和四六年五月一五、一六両日に開催された第二二回日本東洋医学会総会には会長として総会を運営され、自ら「漢蘭折衷派と解剖学」と題する会長講演も行われた。私の父敬節は古い医史学会会員であったため、小川先生と御交誼をいただいていた。私は昭和四一年に外国留学を終えて帰国したが、三年半のヨーロッパ滞在中に西洋本草を知ったことから医史学への関心が高まり、四二年春に名古屋で医史学会総会が開かれた時に初めて総会に参加し、その折、父から小川先生、大鳥先生に紹介してもらった。その折、先生から「一度順天堂に遊びに来るよう」とのお言葉をいただいたのが大変嬉しく、すぐに順天堂大学の先生のお部屋を訪ねて以来先生に親しく医史学の御教示を賜わることとなったのである。私より十日ぐらい遅れて酒井シヅ先生が小川先生の正式の助手として医史学教室に入室された。そのうちに、小川先生の御提案で毎週一回抄読会をやるうということになった。メンバーは小川、大鳥両先生、酒井先生と私の四人で、輪番に欧文の医史学関係の近着誌よりすぐれた論文を選んで、それを紹介するという形式で行われた。従って一カ月に一度位の割合で当番となる。小川、大鳥両先生のような大家の御講義をこのような家族的な雰囲気で拝聴できたのはまことにぜいたくなことだった。抄読会が終わると雑談になるのだが、これがまた大変楽しく、学ぶところがきわめて多かった。

昭和四四年にはオランダのライデン市で日蘭文化交流に関するシンポジウムが行われ、緒方富雄先生を団長として総勢三十余名が参加し、大鳥先生、酒井先生、私ともに参加したが、小川先生は参加されなかった。先生は海外旅行はお好きだが、団体でできたコースを回られるのは好まれなかったようである。また、ホテルなども予約したりせず、自由な旅程で一人旅を楽しまれるのがお好きなようであった。そして、その旅の中から数々のエピソードが生まれ、それを私どもに

話してくださるのだった。有名なモニカの逸話もその一つである。いつかの御旅行の際に、先生はミュンヘンのマクス・プランク研究所を訪ねられた。その時、研究所の前の広場で遊んでいた三、四歳ぐらいの可愛い女の子を眼にとめられ、お話をして、写真をとってこられた。御帰国後、新聞社関係の人に、その時の話をなさり、写真を見せられたところ、話が大きくなって、ミュンヘンの新聞に、写真入りで「モニカは何処にいる？」との記事が載ったそうである。すると、すぐに反応があり、モニカはマクス・プランク研究所の近くの郵便局長さんの娘だということが分った。これからモニカとの文通が始まり、二十年余にも及んだというのである。先生のモニカ熱は相当なもので、東大名誉教授の酒井文徳先生のお話によると、ある日、小川先生が都電か都バスに乗っておられた時に、たまたまモニカという看板のある店を見て、次の停車場で降りられて、その店に行かれたところ、そこは楽器店で、看板はハモニカとあったのがハの字が消えかかっていたのだそうである。

昭和四五年には江戸時代の小児科の大家である米沢藩医堀内素堂の家に伝わる古文書三百点ほどが堀内家の当主で東京医歯大放射線科の講師を務められていた堀内淳一先生より提供されたことがあった。これを「堀内文書」と呼んだが、杉田玄白、大槻玄沢を始め著名な蘭学者の書簡が多く含まれていて、蘭学研究上きわめて価値の高いものであった。同年に小川先生を班長とする研究班が組織され、文部省の研究費を得て、三年間にわたり研究が続けられた。班員は小川、大鳥、酒井三先生のほかに堀内淳一、片桐一男両先生と私の六人であり、定期的に研究会がもたれたほか、米沢市に資料収集のための旅行も行った。米沢でのことである。川べりの道を歩いていると、急に先生が「きのこだ」と言われた。先生は木のでっぺんの方を指しておられるのである。恥ずかしいことだが、私はきのこは地面に生えるものとしか知らなかった。すぐに近くの家で竿を貸してもらい、それで上手にきのこを落として宿に持ち帰った。名前は忘れたが大きなきのこで食用になるという。その夜は例のきのこを入れて鍋で知人の差し入れの地酒を楽しんだのだ。先生のきのこに関する知識はまことに該博で、休日には殆ど山歩きできのこ狩りを楽しまれたようである。昭和三四年に日本雪医学術探検

隊の隊長としてヒマラヤに行かれた際に持ち帰られた大きな赤い万年草は永いこと先生のお部屋に飾られていた。

昭和四五年春のある日、先生から「アジアの医学体系の比較研究のシンポジウムがオーストリーであるので人を紹介してくれといわれたが君行かないか」との嬉しいお話があった。私が漢方の臨床をしていることを御承知だったからである。翌四六年七月にウィーンの南約七〇軒のところに美しい城で一週間にわたって行われた二十人の参加者よりなるこのクローズドの学際シンポジウムはその後の私の研究生活に測り知れないほどの大きな影響を与えた。ウンシュルトやポルケルトらのヨーロッパにおける中国医学研究者を知るとともに、アーユルヴェーダ、ユナニなどの大伝統医学の権威にも接することができ、また文化人類学、疫学、社会学などの立場から伝統医学を見る姿勢も学ぶことができたからである。

小川先生は順天堂大学に赴任されて以来、順天堂の歴史に大きな関心をお持ちになっておられたが、昭和三八年に『順天堂史』編纂室を設けられ、昭和五年には『順天堂史 上巻』が上梓されるに至った。『医学と私』の結句に「これからの私の最も大切な仕事はやはり『順天堂史 下巻』をなるべく早く作りあげることである」と書かれているが、下巻の上梓を見ずにお亡くなりになられたのはさぞお心残りであったろうと思われる。

先生は昭和四一年に日本学士院会員に選任され、学者として最高の榮譽に浴された。昭和四八年にはロイヤル・ソサエティ・オブ・ロンドンの招請に応じ、学士院を代表して渡英され、交流の実をあげられた。

昭和五一年には、谷口財団医史学部門として第一回国際比較医学史シンポジウムが行われた。これは小川先生と三高以来の親友の間柄にあられる東洋紡会長であられた谷口豊三郎氏が私財を投じて作られた学術振興を目的とする谷口財団の基金により、小川先生をオーガナイガーとして行われたものである。そして、このシンポジウムはその後も毎年一回設けられて現在に及んでいる。このシンポジウムは晩年の先生が最も精魂をこめられたものであるので、この機会にやや詳細に述べてみたいと思う。シンポジウムは医史学を中心とする学際シンポジウムで、十人を超えない参加者（うち日本人五

人、外国人五人)で一週間起居をともしで行う。従って演題は十題だが、参加者は前以てプレリミナリのペーパー(英文約三〇枚程度)を用意し、予め全員に送付しておく。一題に対して三時間が用意されており、演者が簡単に主要論点なり討論希望点を述べたあと、予め指名されているオフィシャル・コメンテーターがコメントを行う。そして一般討論に入るといふしくみになっているが、言葉の上の不便を避けるために有能な通訳を用意し、自由に討論ができるように配慮されている。参加者はなるべく若い学者をとということ为原则として五十歳以下とする。また、ゲストとして高名な学者を随時お招きして、コメントを頂く、などである。午前一題、午後一題を消化することになるが、夜は肩のこらない集会をもち、この際はアルコールを飲みながらでよい。昨年までに九回のシンポジウムが持たれたが、八回目までは小川先生が最高責任者として運営にあたられ、御逝去後の九回目は川喜田愛郎先生の御指導により行われた。小川先生の補佐役として酒井先生と私が第一回以来ずっと参加してきて、その都度大變得るところが大きかったことを感謝している。また、このシンポジウムは外国の学者間でも大變有名になっており、「ワールド・フェイマス」の語を冠して外国で紹介されたこともあったと聞いている。以下に現在までのシンポジウムの概略を記す。

第一回(昭和五一年一〇月二二〜二九日)

テーマ 東西比較医学史(一)

参加者 H. Agren (スウェーデン)、R. K. French (英国)、宮下三郎、中山茂、小川鼎三、大塚恭男、M. Porkert (英国)、酒井シヅ、K. Sharma (インド)、N. Sivin (米国)

ゲスト 赤堀昭、J. R. Bartholomew (米国)、中田直道、中村禎里、大塚敬節、藪内清、矢野道雄(いずれもアルファベット順、以下同)。

第二回(昭和五二年一〇月二三〜二九日)

テーマ 東西比較医学史(Ⅱ)

参加者 赤堀昭、F. U. Bagai (バキスタン)、J. G. Bossy (フランス)、A. R. Cunningham (英国)、後藤志朗、M. Lock (カナダ)、小川鼎三、大塚恭男、酒井シヅ、P. U. Unschuld (西独)、矢野道雄、安井広迪。

ゲスト 土居健郎、川喜田愛郎、間中喜雄、長沢元夫、中村元、藪内清

第三回 (昭和五三年一〇月八〜一四日)

テーマ 医師の職業化

参加者 F. P. Lisowski (香港)、D. V. McQueen (米国)、中山茂、小川鼎三、大村敏郎、大塚恭男、J. V. Pickstone (英国)、酒井シヅ、P. U. Unschuld (西独)、山本徳子、F. Zimmermann (フランス)。

ゲスト 川喜田愛郎、中川米造、宗田一、藪内清。

第四回 (昭和五四年一〇月二一〜二七日)

テーマ 心の病氣と治療

参加者 H. Ågren (スウェーデン)、W. F. Bynam (英国)、H. F. Ellenberger (カナダ)、昼田源四郎、M. Siwiak-Kobayashi (ポーランド)、F. Lieb-Mak (香港)、中井久夫、中西進、小川鼎三、大橋博司、岡田靖雄、大塚恭男、酒井シヅ。

ゲスト 土居健郎、川喜田愛郎、小野泰博、山田光胤、吉岡真二、林宗義。

第五回 (昭和五五年一〇月二六日〜十一月一日)

テーマ 公衆衛生

参加者 C. C. Hannaway (米国)、L. J. Lordanova (英国)、紀伊国健三、Ch. J. Lawrence (英国)、Kan-wen Ma (中国)、丸井英二、松村康弘、野見山一生、小川鼎三、大塚恭男、酒井シヅ、J. S. Scarborough (米国)、M. Skopce (オーストリア)。

ゲスト 赤堀昭、安芸基雄、藤野恒三郎、川喜田愛郎、大井玄、大村潤四郎、曾田長宗。

第六回(昭和五六年九月一七〜二四日)

テーマ 医学教育

参加者 H. Beukers (オランダ)、『Zhi-fan Cheng (中国)』、『M. Imbault-Huart (フランス)』、『石田純郎、丸山敏秋、川米造、小川鼎三、大島智夫、大塚恭男、M. J. Peterson (米国)』、『酒井シヅ』、『M. Skopec (オーストリア)』。
ゲスト 川喜田愛郎、紀伊国健三、真島英信、緒方富雄、鈴木淳一、藪内清。

第七回(昭和五七年九月一九〜二六日)

テーマ 産科

参加者 S. Boonyanit (タイ)、『J. E. Donnison (英国)』、『石原力、蔵方宏昌、M. Laget (フランス)』、『J. W. Leavitt (米国)』、『Kan-wen Ma (中国)』、『宮里和子、小川鼎三、大島清、大塚恭男、酒井シヅ』、『D. Stich (西独)』。

ゲスト 鎌田久子、丸井英二、松本清一、相馬広明、杉立義一、田村久弥、藪内清。

第八回(昭和五八年九月一八〜二五日)

テーマ 病理

参加者 J. C. Bürgel (スイス)、『Hsien-ehh Chang (台湾)』、『細野由美、五十嵐一、梶田昭、小曾戸洋、R. C. Maulitz (米国)』、『小川鼎三、大塚恭男、Bou-yong Rhi (韓国)』、『酒井シヅ』、『U. H. Troehler (スイス)』。

ゲスト 川喜田愛郎、鎌田久子、松下正明、久留裕、藪内清。

第九回(昭和五九年九月二三〜三〇日)

テーマ 診断

参加者 川喜田愛郎、木原弘二、栗山茂久、Ch. Leslie (米国)、『松下正明、光藤英彦、大塚恭男、S. T. Reiser (米国)』。

G. B. Risse (米国)・R. Wittern (西独)・中田均。

ゲスト 小林忠義、水上茂樹、藪内清、矢島文雄、矢野道雄。

先生が重い御病氣にお罹りになられたことを酒井先生から知らされたのは三、四年も前のことだったと思う。当然の事ながら、真の病名は先生には秘されていたが、医師である先生がある時期にご存じにならないわけはなかった。しかし、この間の先生の起居は全く平常と変ることなく、温顔は絶えることは無かった。なお、その間に、一度アダムス・ストークスの発作をおこされたことがあった。たまたま幸いなことに順天堂大学の構内であったために、直ちにCCUに運ばれ、万全の治療を受けられて事無きを得たのだが、御退院後は「運がよかった」とおっしゃるだけで、すぐに普通の研究生活にもどられて変るところはなかった。

先生と最後にお話を交すことができたのは、お亡くなりになられた年の一月三日のことであった。先生は順天堂大学に御入院中であつたので訪問はさし控えていたが、酒井先生から「このところ順調なので訪ねてもよい」旨のお許しを得て、新年の御挨拶にあがつたのだつた。その時には女子医大一年在学中の次女を連れて行つた。というのは、この子が女子医大に入学できた時、先生は大変喜んで下さり、酒井先生と御一緒に拙宅までお祝いに来てくださったことがあつたからである。先生はお元気なように見受けられ、いろいろとお話をなされ、私の持参した『医学と私』にサインをして下さつたりした。

そして四月二八日夜、帰宅した私を待っていたのは「先生危篤」との酒井先生からのお電話だつた。私はその足で順天堂医院記念病棟の御病室に向つた。御家族の方や酒井先生が心配そうに見守る中で、先生はなおあまり苦しそうな御様子も無くお休みになられていた。「先生」と言うと、「ああ」というふうに口を動かされるが声にはならなかつた。そして翌二九日朝には不帰の客となられたのだつた。

先生はまことに人生の達人であられたと思う。国内、国外を問わず御交友の大変広い先生だったが、それらのすべての

人に慕われた御人柄の持主だった。医学部入学以来三三年、医史学で親しく御教示を賜わるようになってから算しても七年の永きにわたって御薫陶をいただくことのできたのはこの上ない幸せであったと思う。先生の御冥福を心から祈りつつ筆を擱く。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所)